

2号墳

調査区の北端で見つかりました。一辺約6.5mの方墳です。周溝が見つかりましたが、墳丘はほとんど失われていました。出土品は少なく、この古墳が造られた時期は不明です。



2号墳の全景（南東から撮影）

そのほかの遺構

調査区の西側で竪穴建物1棟、調査区の東側で掘立柱建物1棟が見つかりました。竪穴建物は北側にカマドの痕跡が確認され、周辺で土器が散らばった状態で見つかりました。いずれの建物も飛鳥時代（7世紀）に建てられたものと考えています。



竪穴建物のカマド周辺の土器（南東から撮影）



掘立柱建物の全景（北西から撮影）

まとめ

今回の調査成果のなかで最も重要なことは1号墳の発見です。住吉宮町遺跡では5世紀後半に多くの古墳を造りますが、1号墳はこれに先立つと考えられます。これまで当遺跡では東半部のJR住吉駅北側エリアで最も古い段階の古墳が造られることがわかっていました。しかし、今回の調査で西半部の南側においても古い段階の古墳が造られていたことがわかり、この地域における古墳造りの展開を考えるうえで重要な成果といえます。

さらに、葺石が葺かれた円墳（もしくは前方後円墳または帆立貝形古墳）は当遺跡の西半部の一群では初めての発見です。また、規模の大きさでも今回の調査地周辺で発見されていた古墳に比べて大きいため、1号墳は当遺跡の西半部のエリアにおいては有力であった人物を葬った古墳と考えられます。今後の調査によって埋葬された人物がどのような立場にあったかを知る手がかりを得られることが期待されます。

すみよしみやまち 住吉宮町遺跡第56次調査 現地説明会資料

2021.4.24(土)

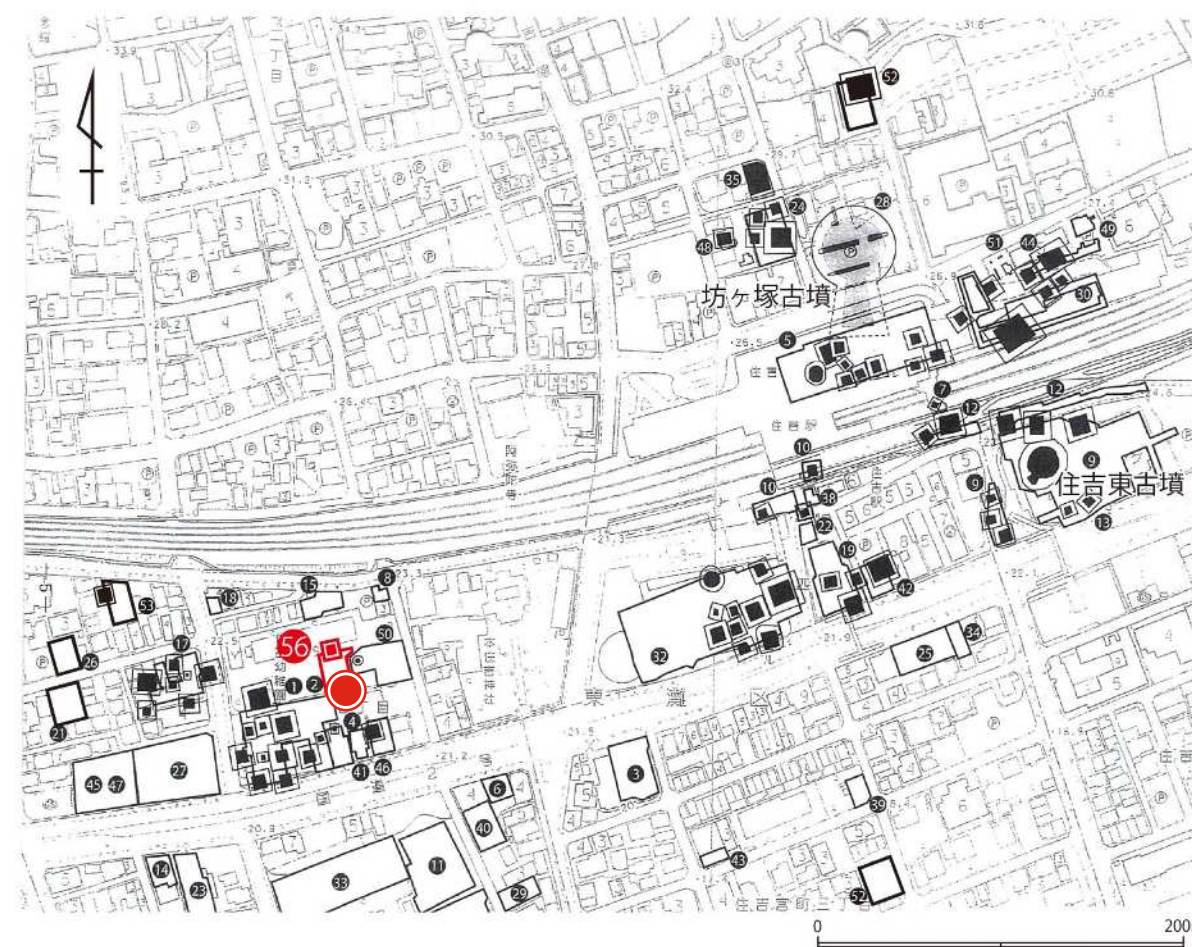
神戸市文化スポーツ局文化財課

はじめに

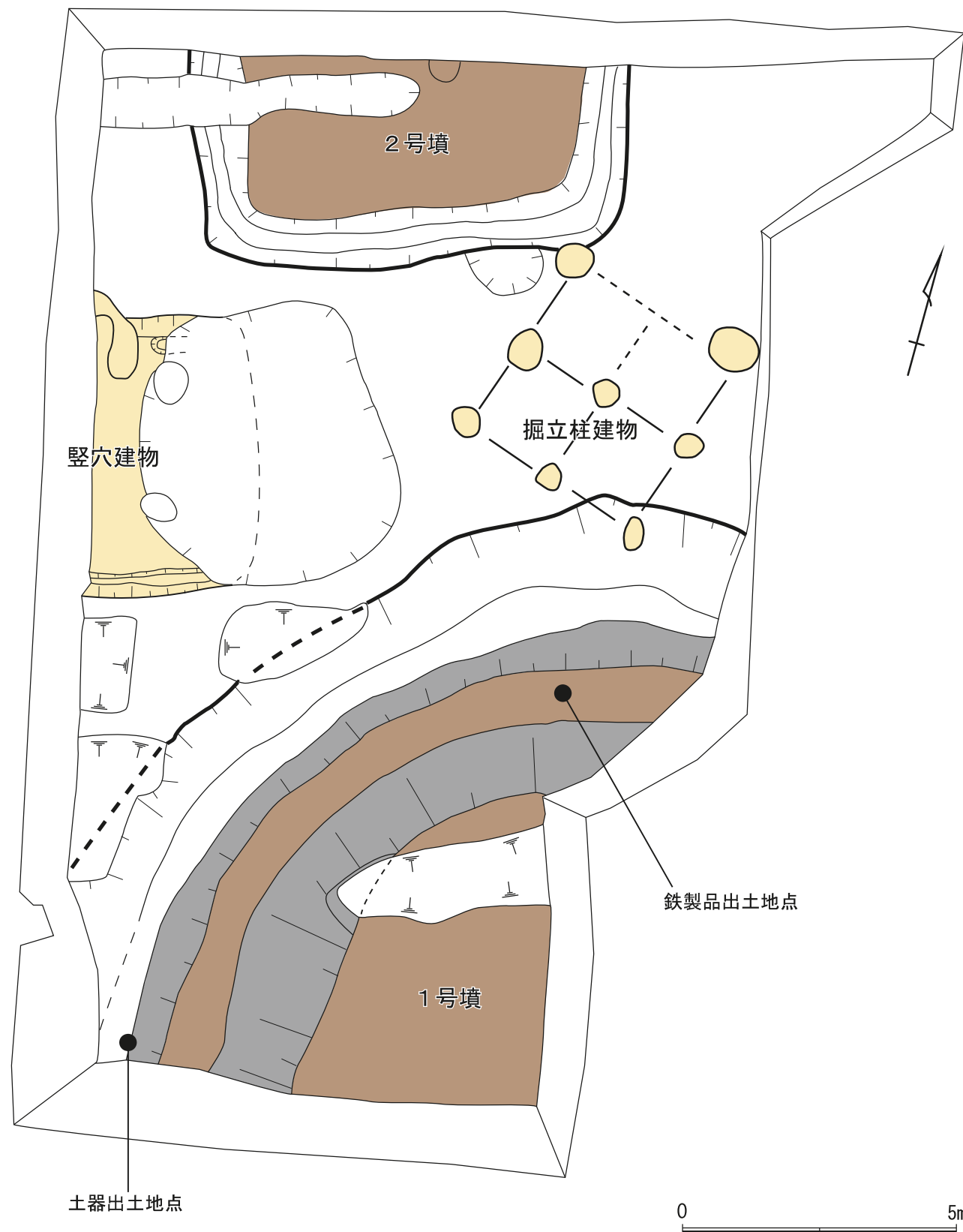
住吉宮町遺跡は、JR住吉駅周辺の東西約800m、南北約500mの範囲に広がる遺跡です。住吉川と石屋川によって形成された扇状地上に立地しています。これまでの調査によって弥生時代から室町時代までの長い間にわたって人々が住み続けた集落であったことがわかっています。

このほか、古墳時代中期（5世紀）には墓域として古墳が営まれ、これまでに80基以上の古墳が密集した状態で発見されています。第28次調査の坊ヶ塚古墳や第9次調査の住吉東古墳は、この古墳群を造った集団の首長墓と考えられています。今回の調査地の周辺でも数多くの古墳が発見されており、さらなる古墳の存在が想定されていました。

今回の調査は、保育園の園舎増築に先立って行われたもので、これまでに室町時代（14～15世紀）の溝、飛鳥時代（7世紀）の竪穴建物や掘立柱建物、古墳時代中期（5世紀）の古墳が見つかりました。



今回の調査地（赤字）と周辺の状況（数字は調査回数、縮尺は4000分の1）



左 : 1号墳の全景 (北から撮影)



右上 : 周溝内の土器 (北西から撮影)



右下 : 古墳テラス上の鉄製品 (北西から撮影)

1号墳

調査区の南半部でみつかりました。形状は円墳と考えられますが、前方後円墳もしくは帆立貝形古墳の可能性もあります。円墳であれば直径は約 18m、周溝を含んだ直径は約 21mに復元されます。墳丘は2段に構築され、斜面全面に葦石が施されています。周囲は幅約 4.5m、深さ約 1.2mの周溝に囲まれています。7世紀までの洪水によって覆われたため、非常に良い状態で残っています。

周溝の外側よりもテラスが低いものの、墳頂部は周溝の外側よりも高くなっています。このため、周溝を掘り下げると同時に古墳の2段目の途中までを削り出し、最終的に土を盛って古墳を高くしたと考えられます。また、古墳の裾部の葦石が周るのに対し、墳頂部の葦石は直線に並んでいました。このため、古墳の形を円形に整えるにあたり、直線で多角形を造ることで遠目には円形に見えるような造り方をした可能性が考えられます。

古墳のテラス上と周溝の底で鉄製品が発見されました。周溝を埋める洪水砂からみつかった土器が5世紀前半のものであることから、それ以前に造られた古墳と考えています。これは、これまでに知られている住吉宮町遺跡内のほかの古墳と比べても古い段階のもので、

なお、埋葬施設の存在は不明ですが今後の調査で確かめていく予定です。

古墳各部の名前

- ①埋葬施設：被葬者を葬る場所
- ②葦石ふきいし：古墳の斜面に葦かれた石
- ③テラスしゅうこう：古墳の途中に設けられた平坦面
- ④周溝：古墳の周りをめぐる人工的な溝

